

主よ、祈りを教えてください

大学一般教育部 松本 周

¹ イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。² そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ、

御名が崇められますように。

御国が来ますように。

³ わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。

⁴ わたしたちの罪を赦してください、

わたしたちも自分に負い目のある人を

皆赦しますから。

わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』

ルカによる福音書 11 章 1 節-4 節

しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

ルカによる福音書 22 章 32 節

聖書には数多く祈りの言葉が収められています。個人が人生の諸局面で祈った言葉、社会的大変動や自然災害に直面しての祈り、友人や同胞を覚える祈りなど、様々な言葉があります。歴史と時代を超えて受け継がれてきた祈りの言葉の数々、その意味で聖書は「祈りの学校」でもあります。

そしてイエス・キリストがよく祈られました。聖書にはイエスさまの祈られる姿が多く記されています。今日共に聞いたルカによる福音書 11 章も祈るイエスさまを記します。そして祈り終えたイエスさまに、弟子の一人が願い出ました。「わたしたちにも祈りを教えてください」。何気ない一言のようで、人間存在の根本に関わってくる言葉が発されています。わたしたち人間は、神から祈りを教わって祈ることができる。その事実が「祈りを教えてください」という一言に込められています。わたしたちは自分自身の力で祈ることができない存在です。祈りの言葉を知りません。わたしたちが自分から口にする祈りの言葉があるとすれば、せいぜい祈願です。「志望校に合格しますように」「家内安全無病息災」など自分の願い事を言葉にする祈りしかできないのがわたしたちです。

今、この時代・世界が真に必要とする祈り、自然災害や破局的な事件の中で痛み傷つく方々へ届く祈り、わたしたちにとって自分の願い以上に大切な真理を求める祈り、そうした言葉はわたしたち自身で紡ぎ出すことはできません。そこに「主よ、祈りを

教えてください」という求めが起こります。

祈れない、自分の内から祈りの言葉が出てこない。そのことをわたしが思い知らされたのは、2011年3月11日の東日本大震災のときでした。あまりの衝撃で、わたしは祈ろうとしても言葉が出てこなくなっていました。ただとめどなく涙が溢れ出てきます。試練のとき、悲しいとき、神さまに祈る。クリスチャンホーム育ちであるわたしにとって、身についているはずのことでした。人生で牧師として数多く祈るうちに、祈りの言葉は自分の中から自動的に出てくるものとわたしは勘違いしていたのです。けれどもこの時、祈りの言葉が全く出てこなかった。祈れなかったのです。

祈れない苦しみの中で、聖書の言葉と出会いました。今日共に聞いたルカ福音書22章です。「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい」。聖書を通して、イエスさまの声を聞きました。祈れないわたしのために、祈ってくださる方がここにいらっしゃる！

祈ってくださる方がいる。心に身体に重荷を負って押しつぶされそうなとき、困難や試練に直面し進むべき道が八方ふさがりに思えるとき、大きな破局や深い絶望の中で言葉を失うとき。もはや祈りの言葉が出てこなくなってしまう、無力と喪失のさなかにあるそのとき。わたしが祈れなくても、「あなたのために祈る」と語りかけてくださる方がいらっしゃる。

「あなたのために祈った」というイエスさまの言葉と出会ったとき、わたしに祈りの言葉が与えられました。最初に祈ったのは「主の祈り」です。今日のルカ福音書11章に記された祈りです「天にまします我らの父よ、願わくは御名をあがめさせたまえ」主が教えてくださった祈りの最初の言葉を口にしたとき、それが呼び水のようになって、わたしに祈りの言葉が湧き溢れてきました。イエスさまは「あなたのために、信仰が無くならないように祈った」と言われ、わたしたちに「主の祈り」そして「祈ること」を教えてください。「主よ、祈りを教えてください」とのわたしたちの求めに応えて、イエスさまは「主の祈り」により、わたしたちに祈りの言葉を教えてくださいました。

話は変わるようですが、宮城学院女子大学では、入学生全員が一年生前期に「キリスト教学」を必修で履修します。宮城学院高等学校はじめキリスト教高校から進学する学生さんもいますが、大多数はこの大学へ入学して初めてキリスト教に接し、聖書を手に入れます。4月の教室では、日本社会全般の風潮で「宗教は怖い、危ない」と感覚的に思い込まされている学生さんたちが、いったいキリスト教学の授業で何を教え込まれるのだろうか、不安と緊張で思い詰めたような表情をしてわたしの方を見えています。

その不安を取り去ってもらうのが、キリスト教学担当教員の最初の仕事になります。まずキリスト教に対する不安や偏見をなく、続いて聖書とキリスト教が人類史において果たしてきた役割、現代世界において持つ意味と一緒に考えていきます。わたしが持論を一方通行で語るのではなく、一緒に学び、学生さん一人ひとりが考え発見する過程を大切にしたいと願っています。そして学生さんたちはキリスト教学の単位を無

事に取得すると(学生さんたちの言葉遣いで言えば「落単せずに済む」と)、振り返って「主の祈り」の学びが印象的だったとコメントしてくれます。

たとえば授業でルカ福音書 11 章 3 節「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください」について考えます。最初にわたしが少し解説します。命の創り主である神に向かって、わたしたちが今日を生きていくために必要な食物を備えてくださいと祈ります。わたし自身は今、食物が手に入らなくて窮しているという状況にはないかもしれませんが、けれどもわたしが気付かないだけですぐ傍らに、そして世界に視野を広げると各地に、今日の食糧が得られずに消え入りそうになっている命がある。「わたしに」今日の糧が与えられたことの感謝と共に、世界中で同じ今を生きている隣人、「わたしたち」に命の糧を与えてくださいという祈りがここにあります。わたしの関心事だけで祈りを終わらせず、「わたしたちの」と祈るところに隣人愛の実践があります。こんな解説の後でグループディスカッションをし、授業後にコメントを提出してもらうと、学生さんたちは日本社会における相対的貧困の問題、こども食堂、あるいはウクライナなどに思いを馳せて、この祈りと現代社会とのつながりを見いだします。

また、4 節「わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。」この祈りの言葉が厳しいと感じるキリスト教徒がたくさんいるという話をします。わたしもその一人です。皆さんにキリスト教を伝えているわたしですが、わたしにもどうしても赦せない人がいます。この言葉を実行できないのがわたし自身なのです。そう話したうえで伝えます。「わたしは許せません。だから、この言葉を祈るのです。」自分の努力でなんとなること、神の力を必要としないことならば、最初から祈る必要もないのです。その生き方が素晴らしいことを知りながら、どうしてもできない自分を知らされるがゆえに祈る。それがこの祈りです。わたしに罪を犯した人を赦す、敵を赦す、わたしたち一人ひとりにとって最も難しいことです。それは究極の隣人愛の姿です。今の自分にはできない。でも祈って、少しずつでもそのことを心がけて、成し遂げていけるように祈っていく。そのことをこの言葉は語り掛けています。そして一人ひとりにとっての「赦しと和解」という倫理的問題を皆で共に考えていきます。

「祈りの学校」である聖書を礎にする学校が宮城学院です。この学院で学ぶ一人ひとりと共に、主が教えてくださった「主の祈り」を深く学び心に刻みたいと願います。「主の祈り」が現代社会に語りかけていること、イエス・キリストを土台とする赦しと和解によって生かされていることを受け止めつつ、この祈りを通して建学の精神を具現化する務めへと遣わされたく願います。

〈祈り〉

天の父なる神、「祈りを教えてください」と願うわたしたちに、イエス・キリストを通して祈りを教えてください感謝します。「主の祈り」に示されている姿勢を、わが人生の姿勢として、またこの学び舎に集う一人ひとりと共に祈り求める歩みとさせてください。この祈りから、建学の精神「人類の福祉と世界の平和に貢献する」生き方へわたしたち一

人ひとりを導いてください。

宮城学院のまことの創立者イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン

(2024年2月14日)